

顕 彰 状

竹西寛子氏は1929年4月11日、広島市に生まれた。広島県立広島第一高等女学校在学中の1945年8月、爆心地から2.5キロの自宅で原子爆弾に被爆し、同時に多くの親しい人々を失なった。この衝撃は竹西氏の中に沈潜し、後の著作活動の根となるが、原爆の広島を特別視することも、被爆者として特別視されることをも氏は好まない。戦争や原爆によって変えられていった個人の運命の問題を凝視する氏は、被爆した広島が言わせ、被爆した広島を言う言葉のせめぎ合いに表現者としての基軸を据える。

県立広島女子専門学校を経て、1952年早稲田大学第一文学部国文学専修を卒業した竹西氏は、河出書房、ついで筑摩書房に勤めた。そこで日本古典文学全集の『本居宣長集』を担当し、宣長の文学論・言語論に出会って大きな影響を受けた。そのことが、主として日本の古典文学を現代文学の問題として考えようとする竹西氏の姿勢を決定づけ、日本の古典に関する評論を発表し始める契機となった。

1964年、古典評論に新生面を開いた『往還の記—日本古典に思う』により第4回田村俊子賞を受賞。翌年には『源氏物語論』、1969年には広島の体験を語った短編小説集『儀式』を発表する。一語一句を疎かにしない精密な表現、女性らしいしなやかで鋭敏な批判意識をもって、古典と現代、過去と現在、さらには批評と創作を往還するスタイルは、以後竹西氏の文学活動の際立った特色となる。また、見ることの重さを自覚し、事実に対していかに公平な目を用意するかが小説づくりの第一歩だ、と自戒する竹西氏の複眼的な目の確かさと厳しきは、氏の想念や思索と連動して氏の著作の隅々に及び、表現の普遍性を支えている。

1972年刊行の評論『式子内親王・永福門院』により、翌年第1回平林たい子文学賞を受賞。1975年出版の短編小説集『鶴』により、翌年第26回芸術選奨文部大臣賞新人賞を受賞した。さらに1978年には、故郷広島と東京を舞台に一家族の戦中戦後、過去と現在の人々の行き交いを描いた長編小説『管絃祭』により第17回女流文学賞を受け、1981年には、広島の風土や人々を少年の目を通して描いた短編小説『兵隊宿』によって第8回川端康成文学賞を受賞。1985年には、長編評論『山川登美子—「明星」の歌人』を刊行、同書により翌年第27回毎日芸術賞を受賞し、評論家として、また小説家として確乎たる地位を築いた。さらに、『道づれのない旅』や、『ものに逢える日』『愛するという言葉』『ひとつとや』など数多くの随想集を発表しているが、無垢で透徹した眼と、修飾語を省きに省いた、選びぬかれた言葉による簡明ながら詩情ゆたかなその文体は、端正で気品に満ちたものである。

長編小説『長城の風』を発表した1994年、竹西氏は、作家・評論家としての業績により第50回日本芸術院賞を受賞し、日本芸術院会員に選出された。翌年には「竹西寛子著作集」全5巻が刊行されている。氏はまた、1969年から1996年まで早稲田大学教育学部非常勤講師をつとめ、日本古典作品の講義によって後輩学生に大きな影響を与えた。

以上の業績に鑑み、早稲田大学はここに、校友竹西寛子氏を早稲田大学芸術功労者として永くその栄誉を顕彰するものである。

2001年3月25日

早 稲 田 大 学